わたしの聖ジハード戦

女性が働くということ

連載201

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

報道から考える、人の見え方

かねてから、不思議に思っていることがある。それは、報道で流れる事件当事者の紹介の仕方だ。

ある人が事件を起こしたとする。すると、報道では、名前の前に職業が出るのが通例だ。「主婦」、「飲食店勤務」、「無職」、「会社員」、「スナック経営者」などなど…。何故、名前や年齢、住んでいる地域だけでなく、職業を最初に取り上げるのだろう。

「パート」、「アルバイト」、「学生」というのもある。「パート」や「アルバイト」というのは、職業ではなく勤務形態に過ぎない。「契約社員」「派遣社員」という場合も同じ。名前だけでは個別的すぎてイメージがわかないために、勤務形態を含む職業を紹介するのだろうか。だが、聞いた側はその職業につきまとう自分なりの、勝手なラベル付けをしてしまう。パートと聞いたら、専業主婦が昼間の数時間、生活の糧を得るためにスーパーのレジなどで働く姿を思い浮かべる。しかしこれは、あくまでも個人的経験則に基づいたものだから、当事者にしてみれば至極迷惑に違いない。今時は、若い男性や外国人女性がレジを打っているのをよく見かける。正社員でも最初は研修を兼ねてレジ打ちから始めるかもしれないではないか。それでも、私の中でパートといえば、スーパーのレジを打つ妙齢の女性なのだ。

報道の対象となるのが大学生の場合、アルバイトをしていても「大学生」の方が優先される。大学生が事件の被害者や加害者と聞くと、アルバイトというよりも事件のインパクトはやや強くなる気がする。これも

大学生に対する思い込みなのだろうが、わけもなく「大学生なのに」と思ってしまう。被害者であっても、大学生加害者であっても、大学生はめったに事件に巻込まれないはずだと、根拠なく信じている自分がいるのだ。

このように、マスメディアは必ず名前の前に人物を特定する「何か」を付ける。もっと不思議なのは「美人」という装飾語だ。「美人社長」だの「美人看護師」だの。さすがに新聞では見かけないが、週刊誌ではしばしば目にとまる。だいたい、美人かそうでないかを誰が決めるのだろう？　おそらくは周りの評判や、写真を見た時のひらめきか。逆に「不美人」とわざわざつけることは、まずない。

このような慣習は、起こった事件の事実性や客観性を歪めてしまうとともに、余計な好奇心を喚起させる操作にみえる。どれくらい意味があるのか考えてみると、それほど重要な意味はない気がする。でも、確かに「美人」と付くと、事件への関心そのものが惹起される。ゲスだと言われようが、へんな覗き見根性がムクムクと湧き上がるのを抑えることはとても難しい。

多くの人は、自分がどんな風に評価されるのかを常に気にしながら生きている。ちょうど事件の報道の際に、必ずその人の職業を語るように、私たちは人を判断する時には、どうしても職業や肩書が必要不可欠な項目なのだ。ここでは「無職」でさえ立派な判断材料となる。

人の評価は難しい。肩書や職業だけで安易に判断するのは極めて危険である。であるなら、他人の評価を気にしながら生きることもまた、それほどの意味はないのかもしれない。

意味のないことにとらわれすぎるのは、人生の無駄。「本当のその人」は、永遠に理解のできないところに、ありのまま、そこに佇（たたずんで）いる。

イラスト・伊藤栄章
タイトル・浅井健史